

宮原と則岡家の人々

～VOL I～

奈良大学通信教育部文学部文化財歴史学科
島崎 康

【略歴】

1968年11月 大阪府泉佐野市で生まれる。

1987年 3月 大阪府立佐野高等学校 卒業

1993年 3月 関西学院大学商学部 卒業

同年 4月 泉佐野市役所 就職

2017年12月 湊川神社楠木同族会 入会

2019年 5月 一般社団法人楠公研究会 入会

2020年 3月 泉佐野市役所 退職

同年 4月 関西学院大学博物館学芸員課程 履修

2022年 3月 同課程 修了

同年 4月 奈良大学通信教育部文学部文化財歴史学科3年次 編入学

はじめに...

今から4枚の画像をお見せします。
そこから連想される人物をお答えく
ださい。

①



②



③



撮影者:島崎 康

④



所蔵者：湊川神社(神戸市)

正解は...

楠木正成(大楠公)です。

則岡氏

【則岡氏略系図】

楠木正成

則岡正則

①鎌倉後期～南北朝～室町時代初期
(建武の中興、南北朝の争乱)

②室町初期～戦国～安土桃山時代
(応仁の乱、戦国時代の争乱)

③(安土桃山～江戸時代中期)
(岩室城の陥落、大坂の陣、分家)

④(江戸時代中期～後期)

⑤(江戸後期～現代)
(幕末の動乱、明治維新、日清・日露・大東亞戦争、戦後復興、バブル景気など)

約800年

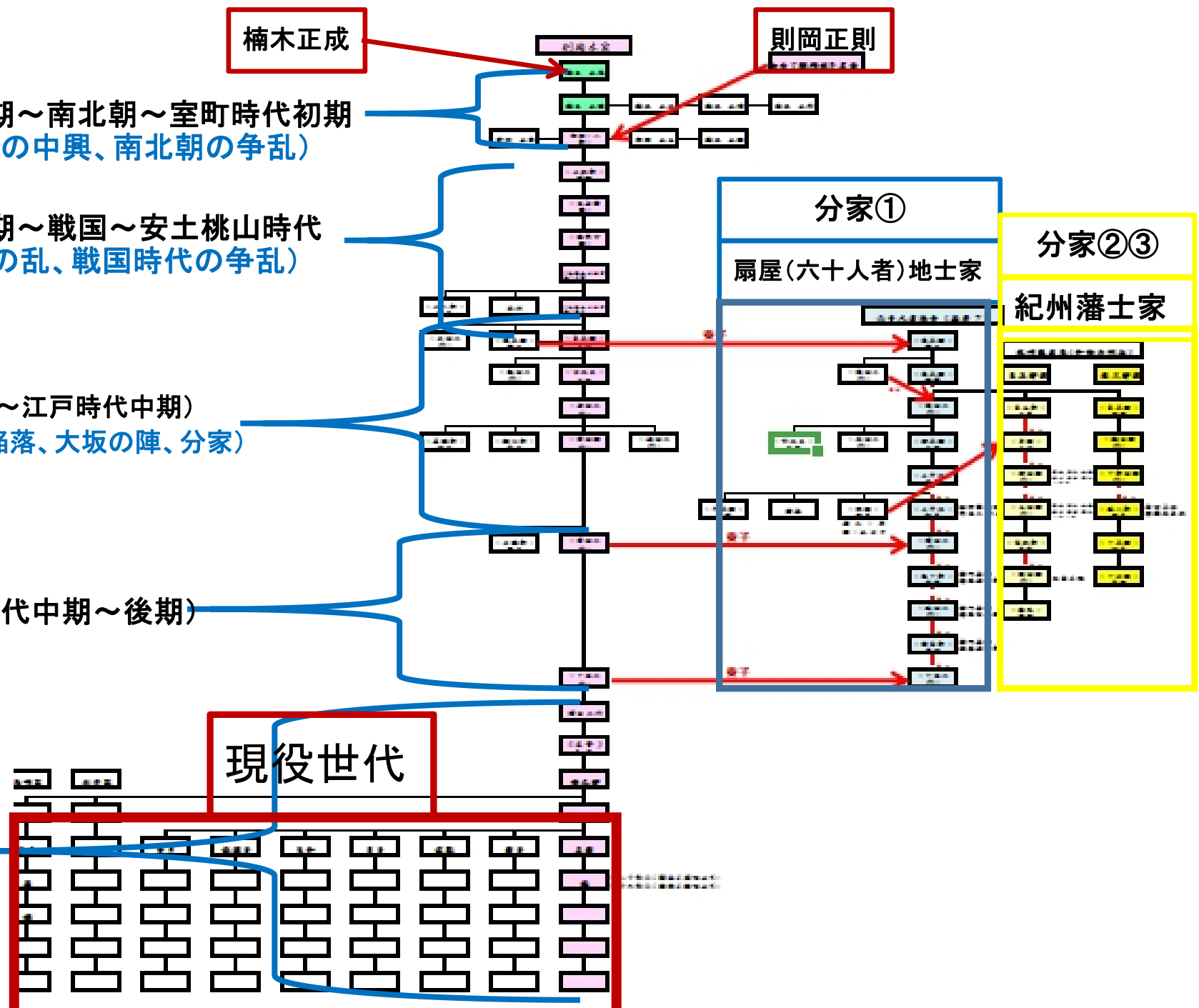
現役世代

分家①

扇屋(六十人者)地士家

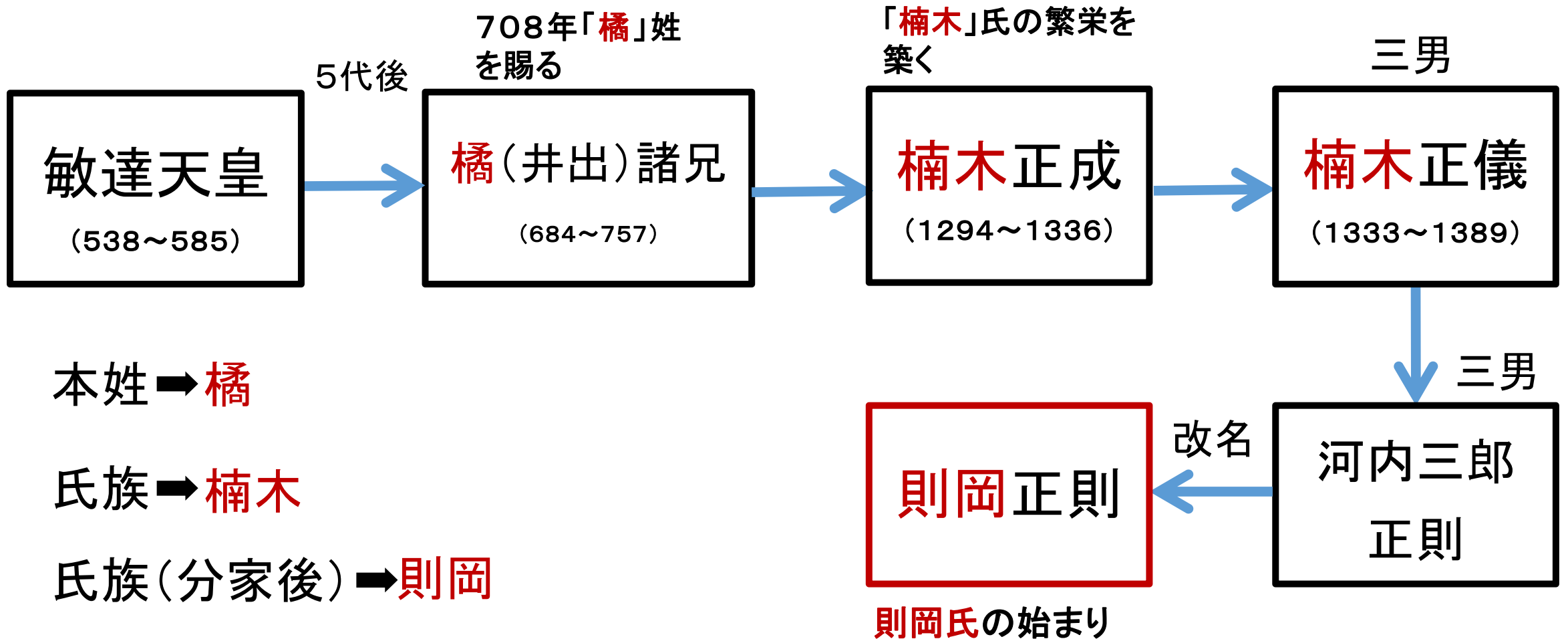
分家②③

紀州藩士家



則岡氏の興り
～室町時代初期～

則岡氏の系譜



※生没年は諸説あり

「則岡系図」1頁より(現代語訳)

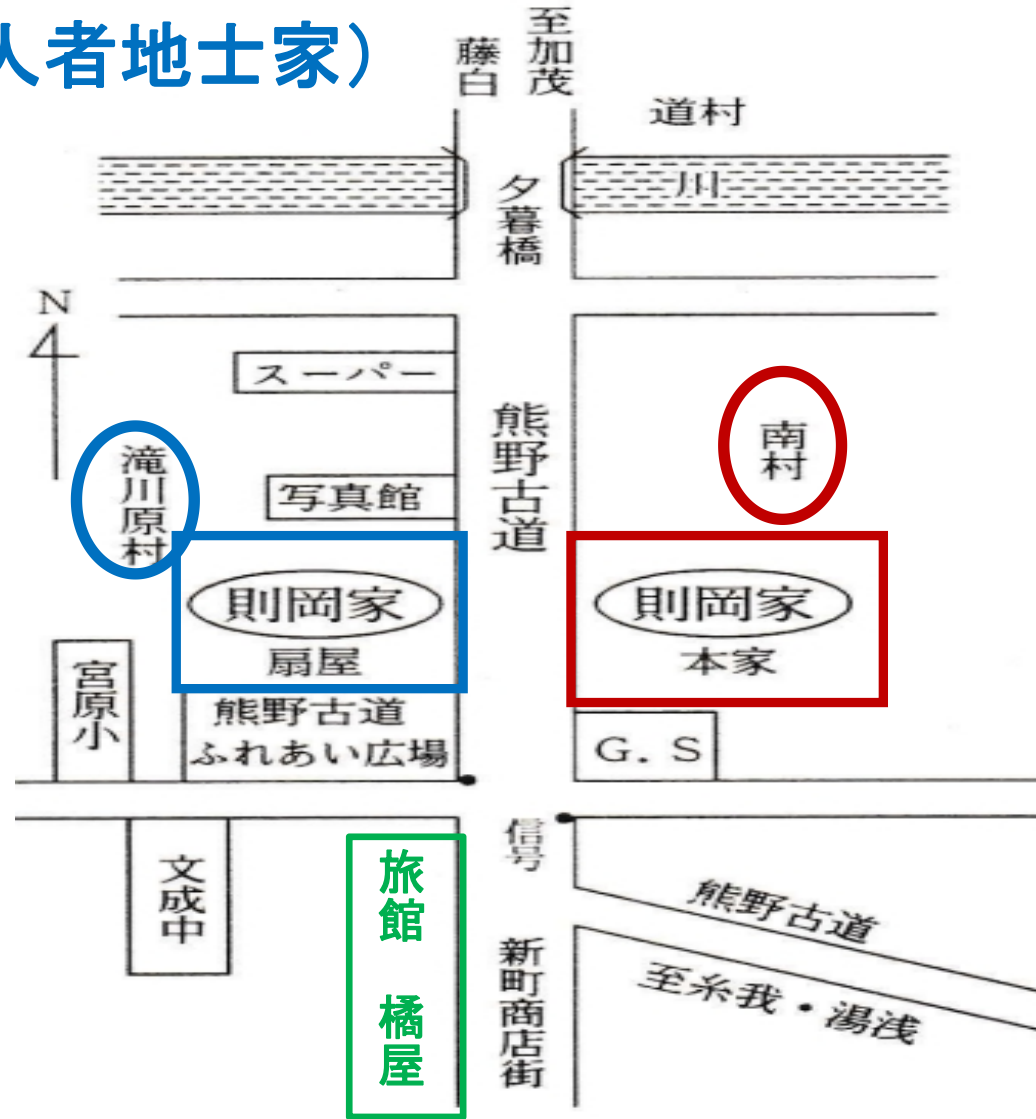
人皇三十一代敏達天皇から五代後の末孫井出左大臣諸兄は、和銅元年(708)橘姓を朝廷より賜った。後に子孫の従四位下河内守成綱の代になると、この一族は楠木姓を名乗った。同家は大阪河内金剛山麓の七郷を領有した。これより六代後の末孫従五位下太夫判官摂津河内守橘正成は、永仁二年(1294)に生まれ、建武三年(1338)五月二十五日摂津国(現在の神戸市)湊川で討死した。死後その遺徳を称えて彼は正三位中将の位を贈られ、南北大明神という神となった。

「則岡系図」1～2頁より(現代語訳)

則岡氏の始祖である河内三郎正則は、楠木正成の三男小次郎(後の次郎左衛門尉左馬頭)正儀の密子で、彼の三男として生まれた。母は紀州阿瀬田荘司で竹内宿祢の末流である田中民部源久岡の娘である。室町時代に入り、南朝と北朝が和睦したことにより、将軍足利義満公の厳命で正則は南紀有田郡宮原荘司に任じられ、一族は代々この地で政務を行った。この頃よりこの一族は、父母の諱を取って則岡姓を名乗った。主君は管領畠山右衛門佐左馬頭基国である。

もう一つの則岡家の誕生
～江戸時代初期～

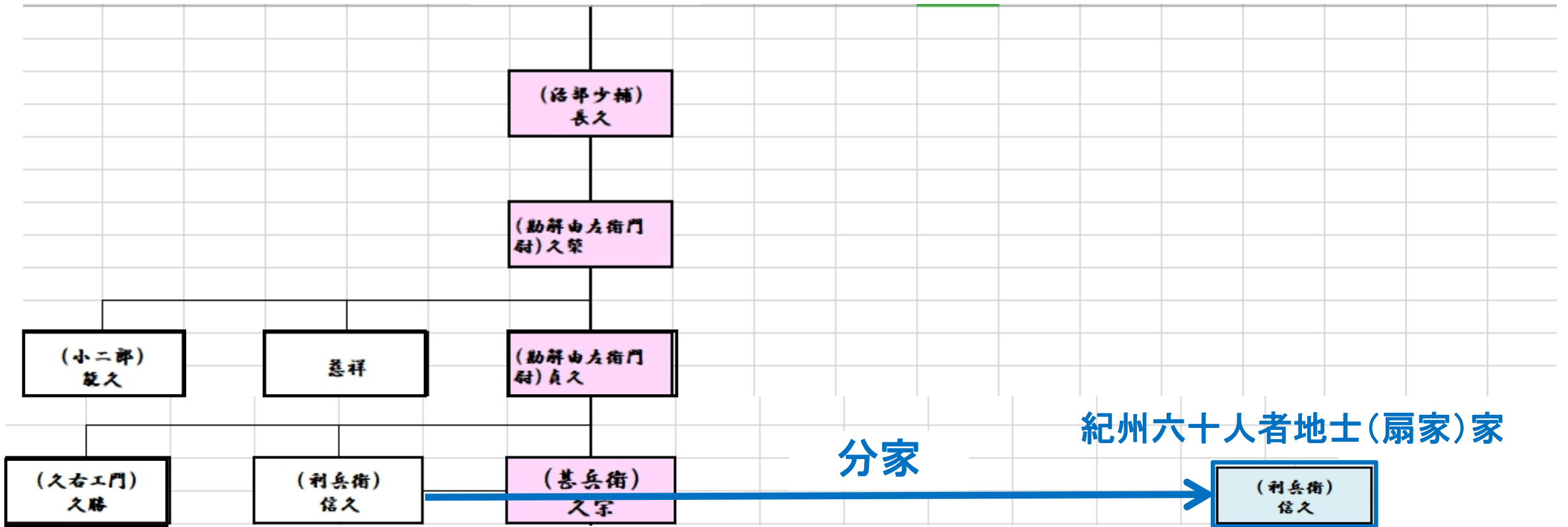
本家と分家(六十人者地主家)



出典: 生駒佳三「甦る宮崎貞直と有縁の人びと」私家版、2000年。

紀州六十人者地土(扇家)家の誕生

本家



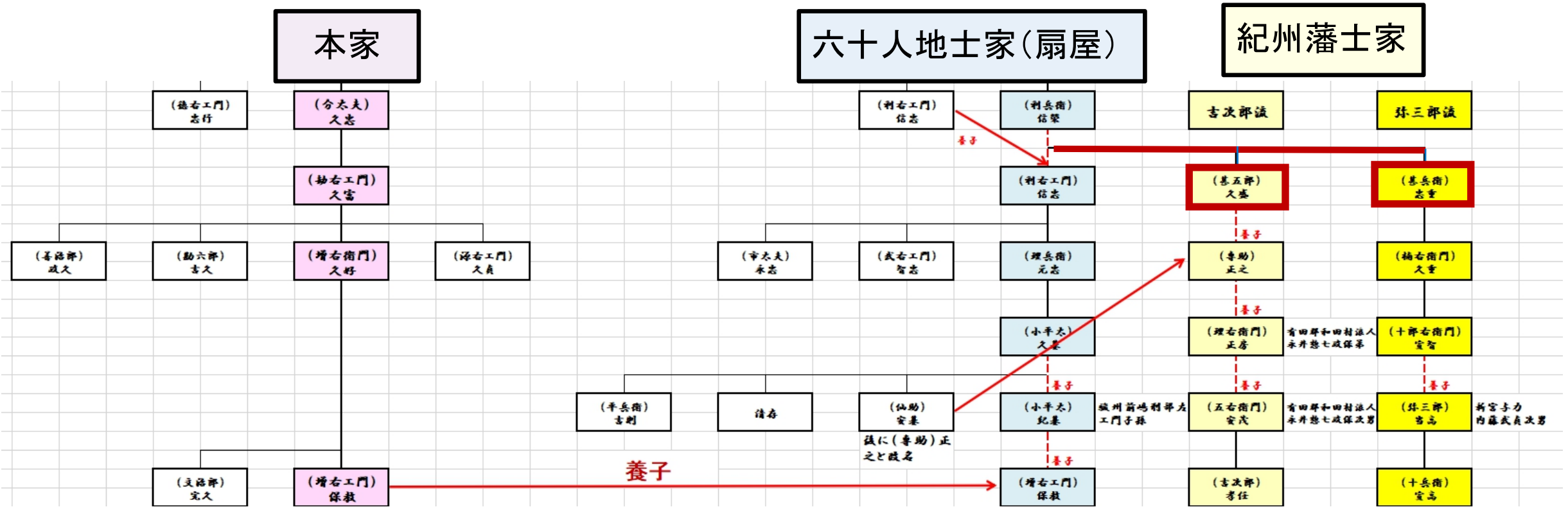
出典: 東京大学史料編纂所蔵「則岡系図」謄写本(原題「本国河州橘姓則岡氏系図」)8~9頁、原蔵者 則岡文平

「則岡系図」7頁より

畠山貞政が岩室城主のとき、豊臣氏により城は陥落した。その後七代目当主則岡(甚兵衛)久宗は大和大納言豊臣秀長に仕えるが、秀長が程なく死亡したので故郷の宮原荘に戻り浪人生活を送る。大坂の陣では、豊臣方の重臣片桐且元より参陣を要請されるが辞退した。その後豊臣氏が滅び、久宗は徳川御三家初代紀州藩主徳川頼宣より六十人者地土に任じられるが、病により勤めを辞退する。代わりに弟の則岡信久がそれを引き受け分家した。以後六十人者地土は信久の筋が勤める事となる。

紀州藩士家の誕生
～江戸時代中期～

紀州藩士家の誕生



出典①: 東京大学史料編纂所蔵「則岡系図」謄写本(原題「本国河州橘姓則岡氏系図」)9頁、原蔵者 則岡文平。

出典②: 和歌山県立文書館 編『紀州家中系譜並に親類書書上げ下』和歌山県、2012年、143頁。

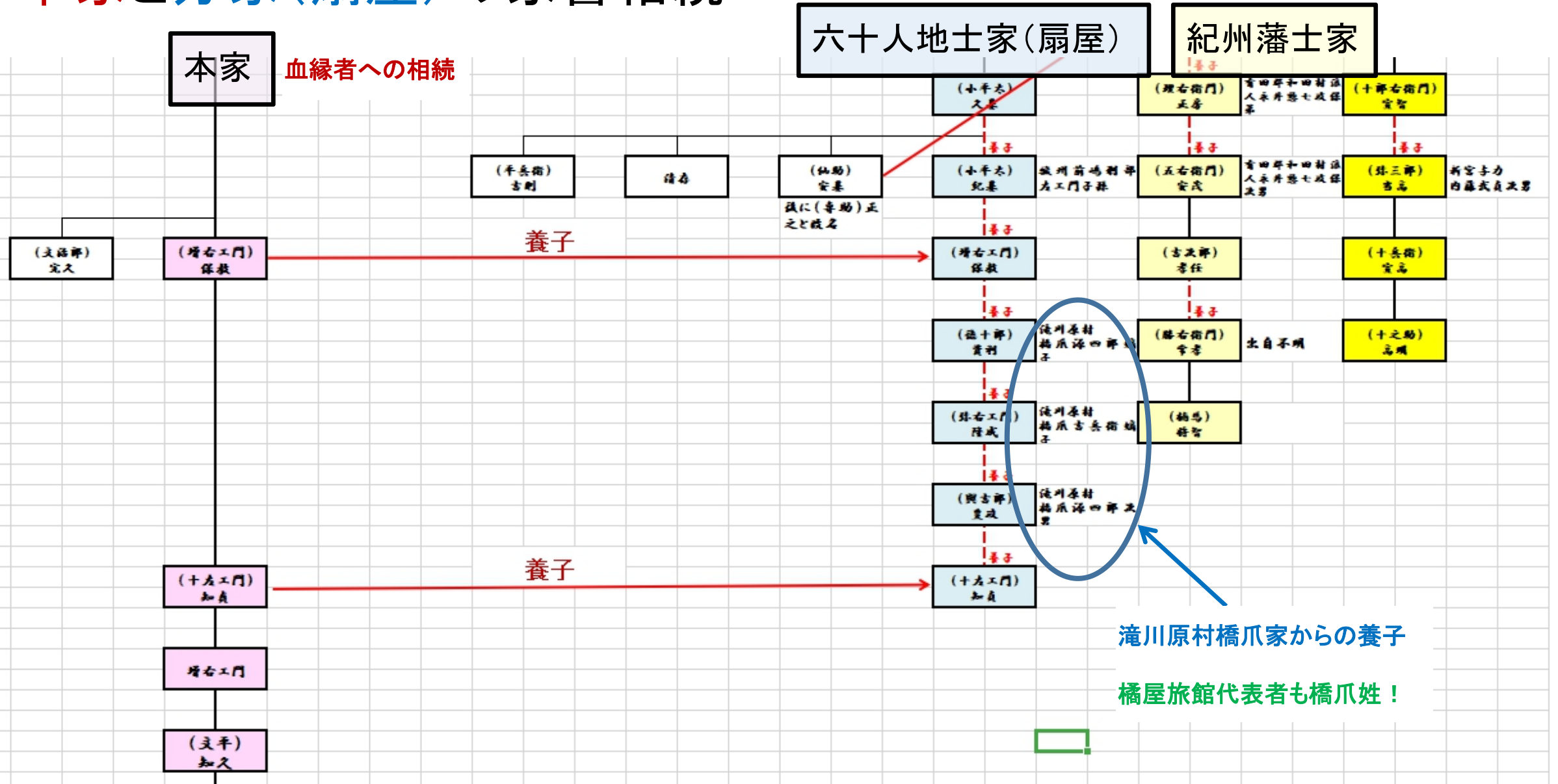
紀州藩への出仕

六十人者地士(扇屋)家第二代当主「**則岡(利兵衛)信榮**」の長男「**(甚兵衛)忠重**」が延宝七年(1679)に、次男の「**(甚五郎)久盛**」が貞享三年(1686)に紀州藩の直参として召し出され、分家した。役職は何れもお目見え以上である。

(5)一族の家督相続について
～江戸時代以降～

本家と分家(扇屋)の家督相続

他家からの養子による相続



出典: 東京大学史料編纂所蔵「則岡系図」謄写本(原題「本国河州橋姓則岡氏系図」)7頁~、原蔵者 則岡文平。

本家と六十人者地士(扇屋)家

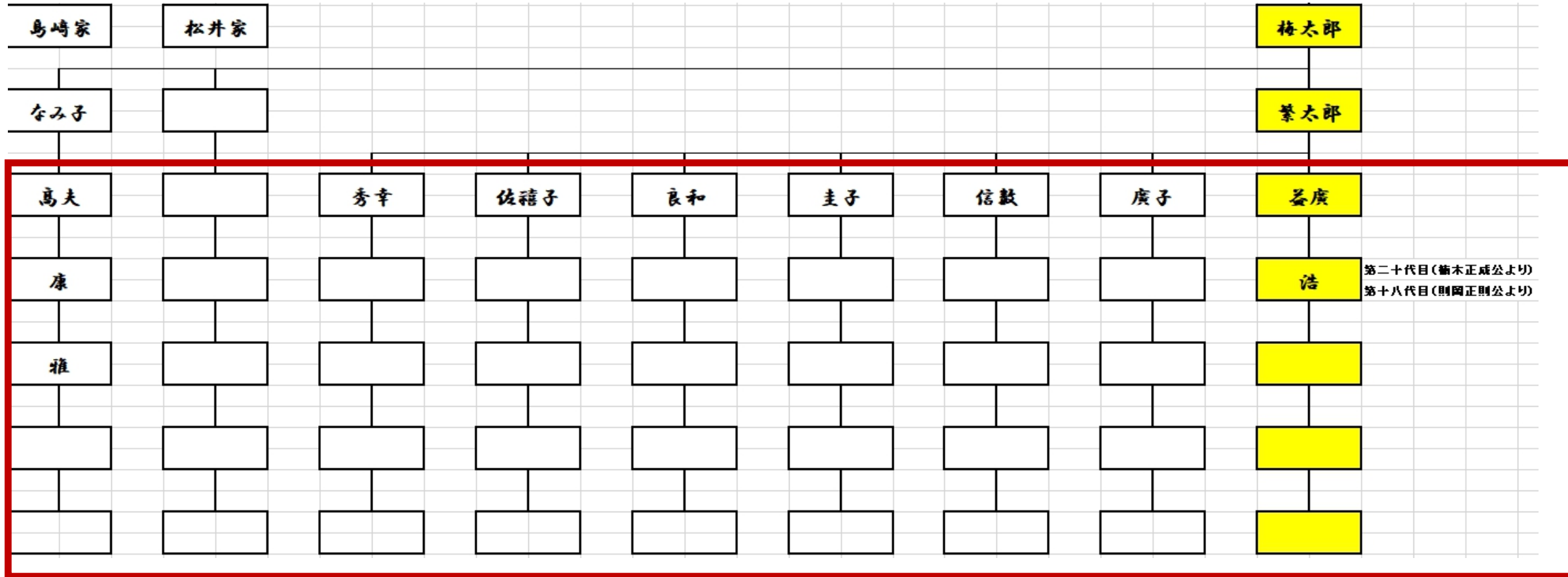
系図を見ると、(甚兵衛)久宗から続く本家の家督は全て血縁者が相続しており、本家は「則岡家」の血筋の存続を重視していると考えられる。したがって現在の則岡家の子孫は(甚兵衛)久宗から続く血筋である。

一方、六十人者地士(扇屋)家は(小平太)久基以降、他家からの養子が家督を相続しており、家名よりも業務や屋号の存続を優先しているように思える。

現在の則岡家

系譜⑤(江戸時代後期～現在)

「則岡氏系図」最新版の作製にあたりご協力をお願いします。

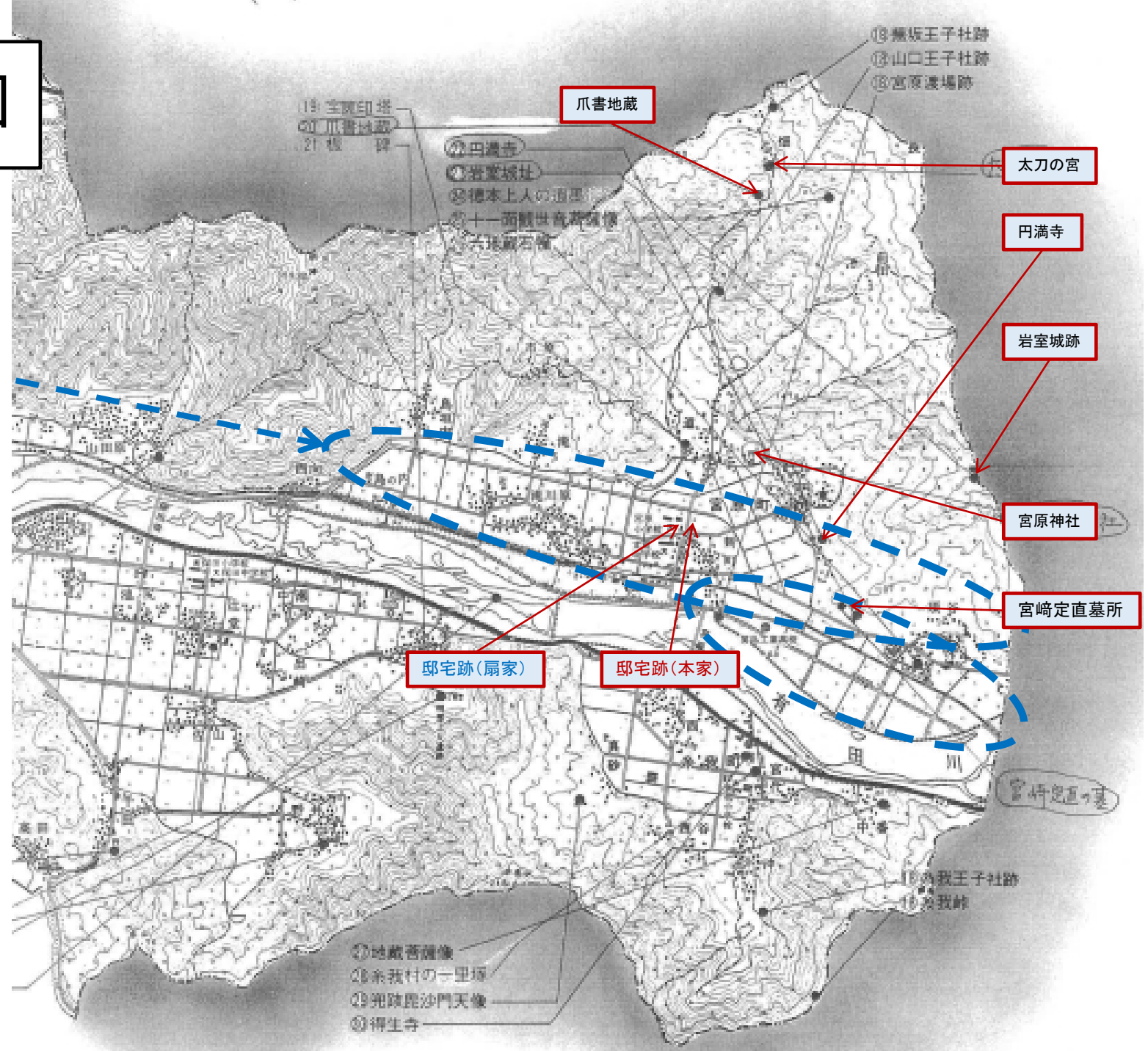


出典:有田市『戸籍(除籍)謄本』、和歌山市『戸籍(除籍)謄本』。

則岡家所縁の史跡等

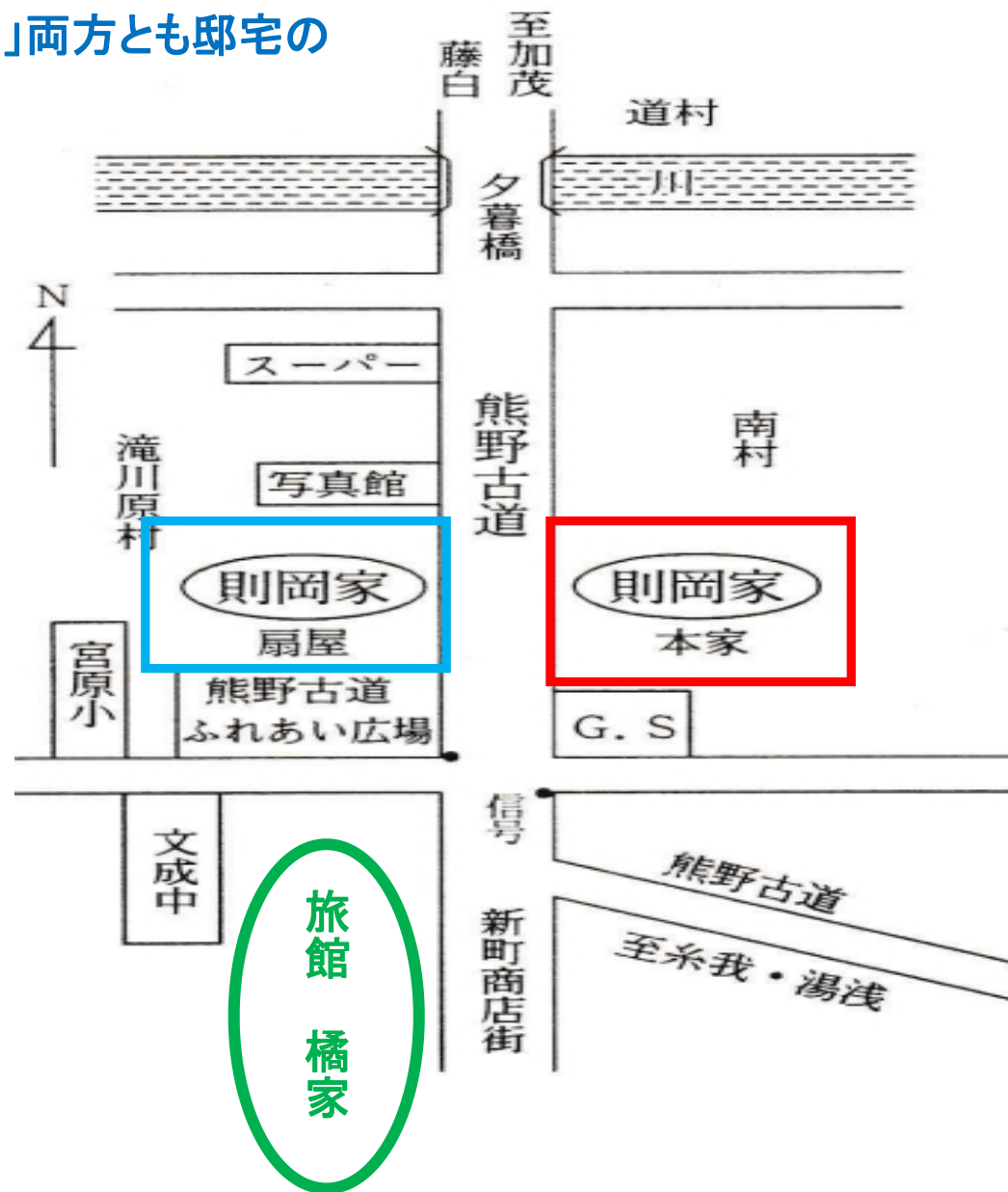
有田市域図

宮原地域



邸宅

残念ながら、現在は「本家」「扇屋」両方とも邸宅の面影は留めていない。



出典：生駒佳三「甦る宮崎貞直と有縁の人びと」私家版、2000年。

「則岡系図」2頁より(現代語訳)

1. 邸宅内にご安置している仏像は、毘沙門天の御立像である。これは楠木(河内判官)正成の守護仏である。

1. もう一つの仏像は不動明王の御座像である。これは正成の三男(左馬頭)橘正儀の守護仏である。

以上これらは楠氏代々の守護仏ということを各々心肝に染め、(蔵人)橘正則の代より子々孫々に至るまで大切にご安置し、引き継いでいくように。

宮原神社

宮原神社 1/3



画像引用: 神社・寺院検索サイト“八百万の神” <https://yaokami.jp/>

宮原神社2/3



画像引用: 神社・寺院検索サイト“八百万の神”<https://yaokami.jp/>

宮原神社(太刀宮)3/3



画像引用: 神社・寺院検索サイト“八百万の神”<https://yaokami.jp/>

「則岡系図」1～2頁より(現代語訳)

則岡家の氏神は本来八幡大神(はちまんおおみかみ)だが、宮原神社の祀神である誉田別尊(ほむたわけのみこと:応神天皇)気長足姫尊(おきながたらしひめのみこと:神功皇后)玉依姫尊(たまよりひめのみこと)を崇めている。※1

※1 当時は八幡大神と誉田別尊は同一の存在であると考えられていた。

「則岡系図」2頁より(現代語訳)

風雨や寒暑などを鎮める神様は道村領の神社で大切に祀られている。祀神は市杵嶋姫命(イチキシマヒメノミコト)である。例年正月七日はこの神社で祭事が行われ、銭や物品等をお供えした。また旧くから代々楠氏に仕えてきた多くの人々も集まり、ご神前でお神酒をいただいた。この祭事の際、ご神前のそば近くに仕える者の代表は、古より則岡家と中西家(?)が交代しこの役目を担当してきた。

円満寺

円満寺 1/6



撮影者: 島崎 康

円満寺2/6



撮影者: 島崎 康

円満寺3/6



撮影者: 島崎 康

円満寺4/6



撮影者: 島崎 康

円満寺5/6



撮影者: 島崎 康

円満寺6/6



撮影者: 島崎 康

「則岡系図」2頁より(現代語訳)

則岡氏が帰依している仏教の宗派は、楠木氏より分家した時期から禅宗である。菩提寺は臨済宗本山由良興国寺を開山した法燈圓明国師の寺で、**岩山円満寺**という。円満寺は宮原荘で最も大きな寺院であるが、則岡氏はその檀家の中でも主だった存在である。

宮崎定直の墓

正面



墓左側面



碑文(市指定文化財)

墓碑(現代語訳)

ここに葬られている武士は熊野大社の祀官実方中将の末孫で、数代にわたり宮崎城主だった宮崎隠岐守の三男で、泉州谷川(たがわ)の住人だった者である。大阪夏・冬の陣の際には、豊臣秀頼公の配下に属し、武勲を立てたが、武運拙く大阪城は落城してしまった。その後籠城していた全国の武士もまとめて赦免された時期に、宮崎定信公は宮原の住人で親戚の則岡分太夫を頼り、その邸宅でそのまま亡くなった。彼の遺言は、故郷の宮崎城跡が臨める場所を選んで葬るようにとのことであった。しかし今この墓は松枯れ朽ちて見るに忍びない状態になっている。それゆえ私、分太夫の嫡孫則岡長太郎は、円満寺の僧侶に読経をお願いし、この碑を建立するものである。

時(とき)元文三年(1738)戊午(つちのえうま)七月七日

實相院一溪浄夢居士墓

宮崎三郎右衛門尉定直

出典:生駒佳三「甦る宮崎貞直と有縁の人びと」私家版、2000年。

宮崎定直の墓碑に関する発見

【通説】

【新説】

①墓碑の建立時期	元和5年(1619)6月18日	同左
②墓碑の建立者	則岡(分太夫)久忠	同左
③墓碑の再建 (再建者)	元文3年(1738)7月7日 (則岡長太郎)	同左 (則岡(文平)保教)
④長太郎の正体	不明(吉久?) ※②の孫	(文平)保教 ※②の曾孫

資料①: 東京大学史料編纂所 蔵「則岡系図」謄写本(原題「本国河州橘姓則岡氏系図」)原蔵者 則岡文平、13~14頁。

資料②: 同上。

資料③: 同上、16頁。

資料④: 同上。

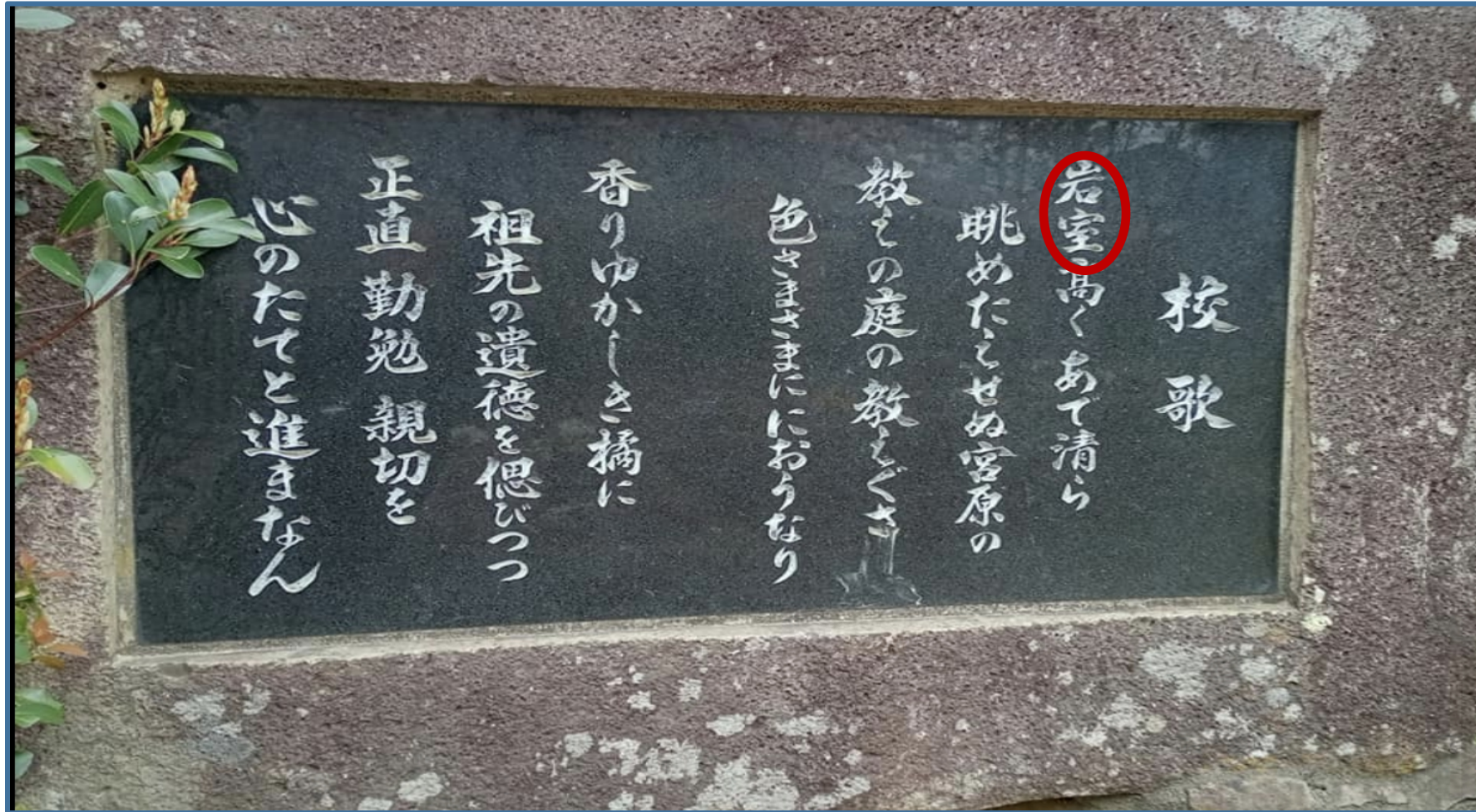
岩室城

紀伊国の城(戦国時代)

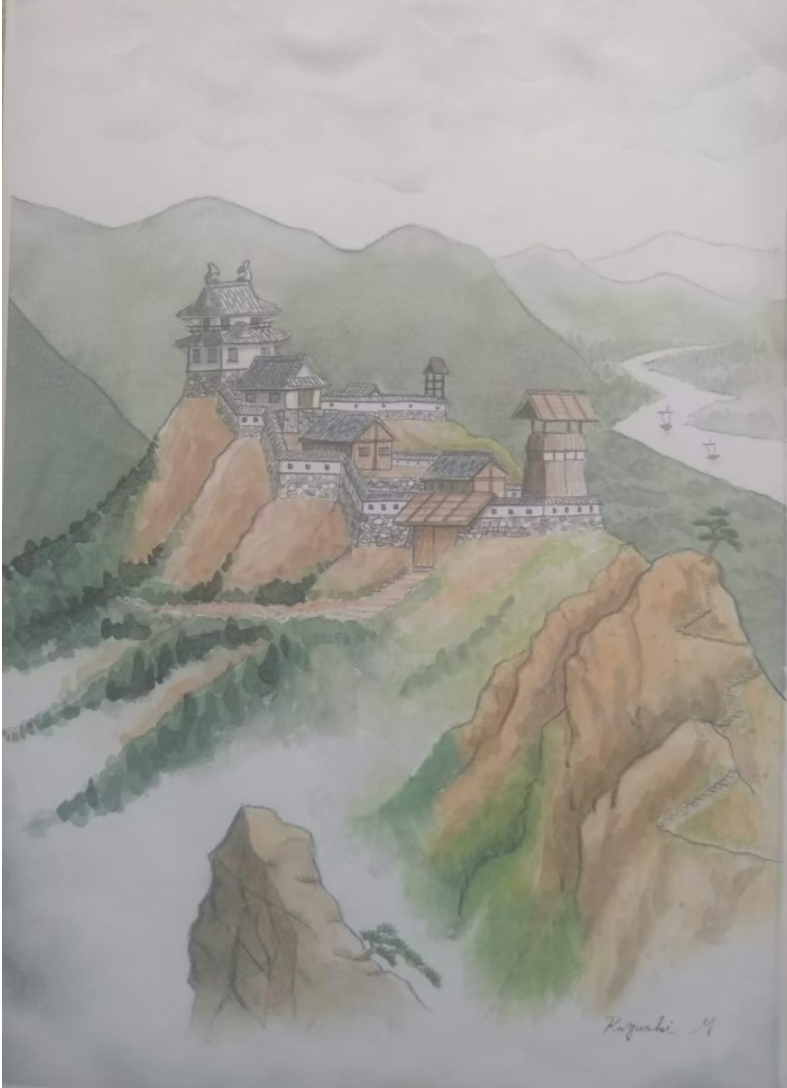


- ・築城年 天正13年(1585)
- ・築城主 豊臣秀長
- ・主な城主 豊臣・浅野・徳川氏

宮原小学校



【想像図】



画像引用:宮原愛郷会 宮本康 氏

岩室城

- ・築城年 不明(平安時代末期)
- ・築城主 湯浅宗重
- ・主な城主 湯浅・畠山氏

出典:有田市公式HP

<https://www.city.arida.lg.jp/kurashi/sportsbunka/bunka/1000911/1000920.html>

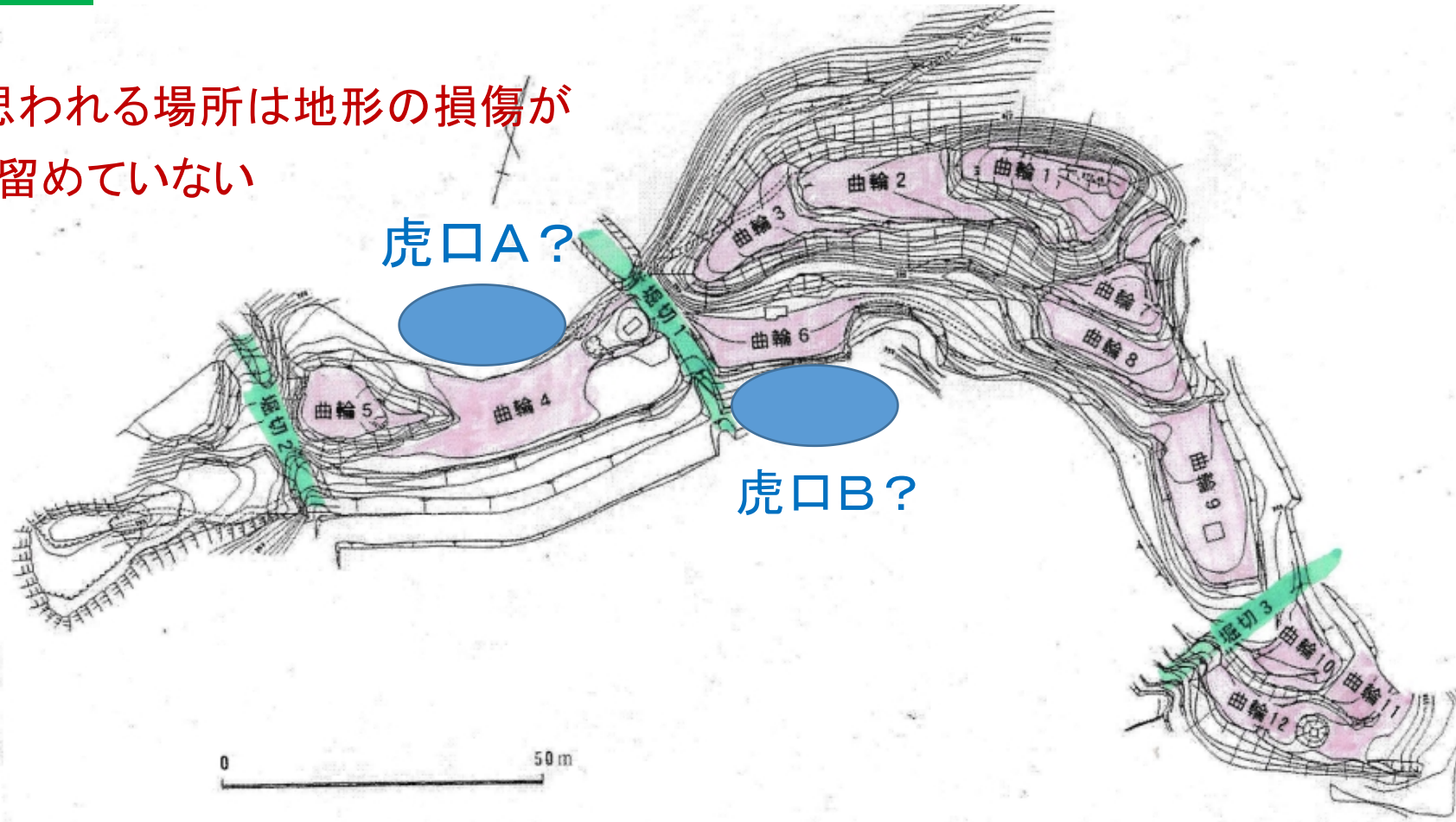
曲輪(くるわ)

岩室城平面図

駐車場方面

堀切(ほりきり)

現在、虎口と思われる場所は地形の損傷が激しく、面影は留めていない



出典①:和歌山県城郭調査研究会代表 白石博則「城郭史から見た岩室城」(講演会資料、2018年3月11日、有田市文化福祉センター。)

出典②:高田徹「紀伊・岩室城の虎口・通路再考」(『和歌山城郭研究』17、2018年)。

曲輪(くるわ)

くるわとは、城の内外を土塁、石垣、堀などで区画した区域の名称である。郭とも書く。主要な曲輪内には、曲輪の出入り口を封鎖する門を始め、最前線の塀、物見や攻撃を与える櫓(やぐら)が建てられる。主郭では司令本部となる城主の居所のほか、兵糧を備蓄する蔵、兵たちの食事を仕込む台所などの建造物が建てられていた。戦時、それぞれの曲輪には守備を担当する兵たちが駐屯した。

出典: Wikipedia <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9B%B2%E8%BC%AA>

堀切(ほりきり)

主に山城に用いられる防御のための土木建築物。城や城塞群において、外敵の侵入防止や遅延のために曲輪や集落の周囲や繋ぎの部分を、人工的に開削して溝(堀)にするもの。空堀の一種。

岩室城跡 1/3



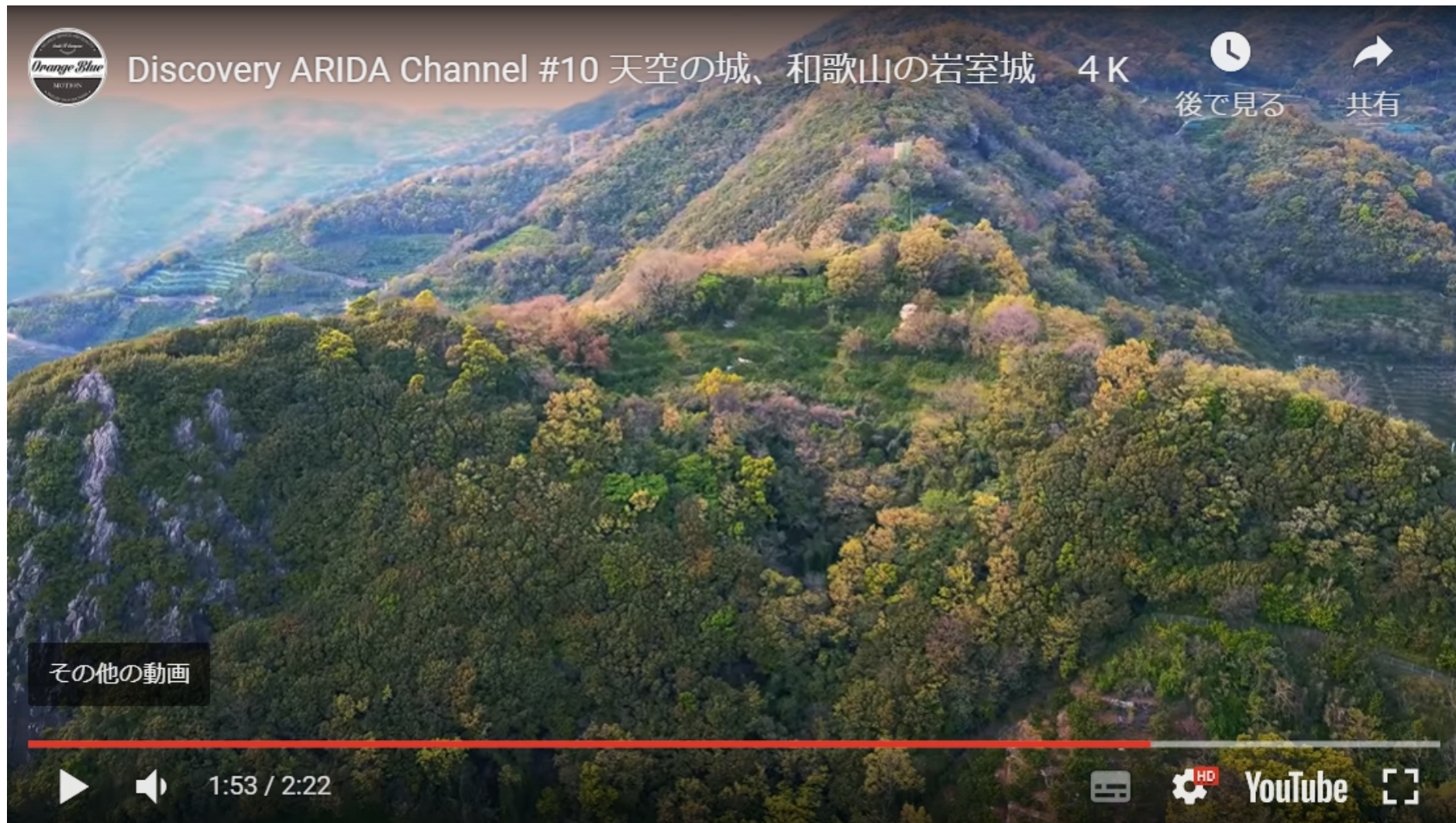
画像引用 : Discovery ARIDA Channel #10 天空の城、和歌山の岩室城 4K

岩室城跡2/3



画像引用: Discovery ARIDA Channel #10 天空の城、和歌山の岩室城 4K

岩室城跡3/3



画像引用: Discovery ARIDA Channel #10 天空の城、和歌山の岩室城 4K

岩室城からの眺望1/4



画像引用 : Discovery ARIDA Channel #10 天空の城、和歌山の岩室城 4K

岩室城からの眺望2/4



画像引用 : Discovery ARIDA Channel #10 天空の城、和歌山の岩室城 4K

岩室城からの眺望3/4



画像引用: Discovery ARIDA Channel #10 天空の城、和歌山の岩室城 4K

岩室城からの眺望4/4



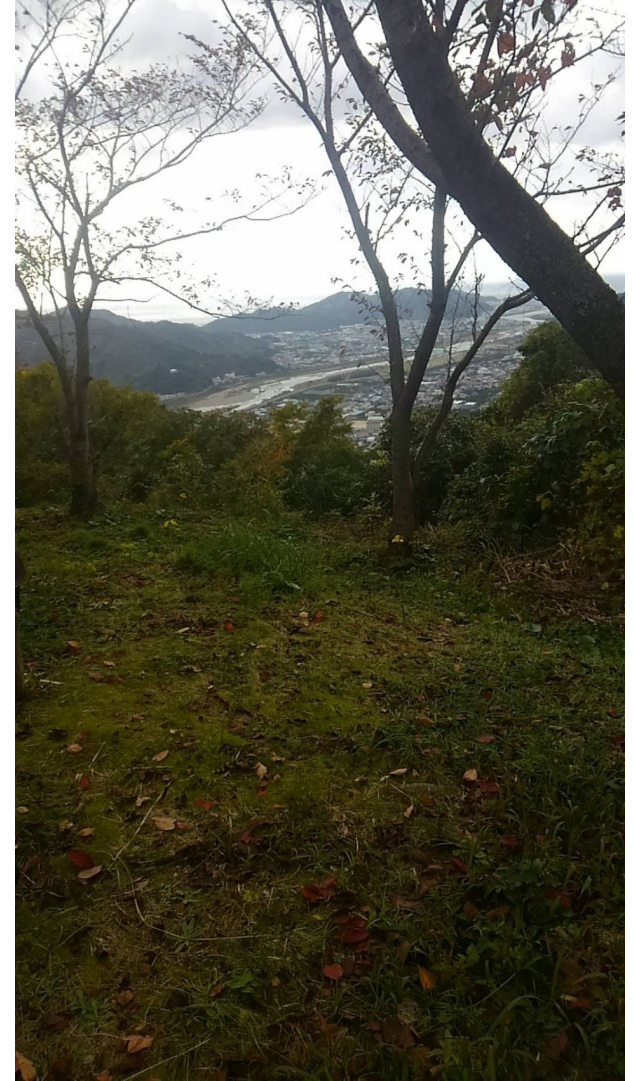
画像引用: Discovery ARIDA Channel #10 天空の城、和歌山の岩室城 4K

現在の岩室城跡 1/2



撮影者: 島崎 康

現在の岩室城跡2/2



撮影者: 島崎 康

畠山氏

畠山氏略系図

○ は岩室城主

東軍

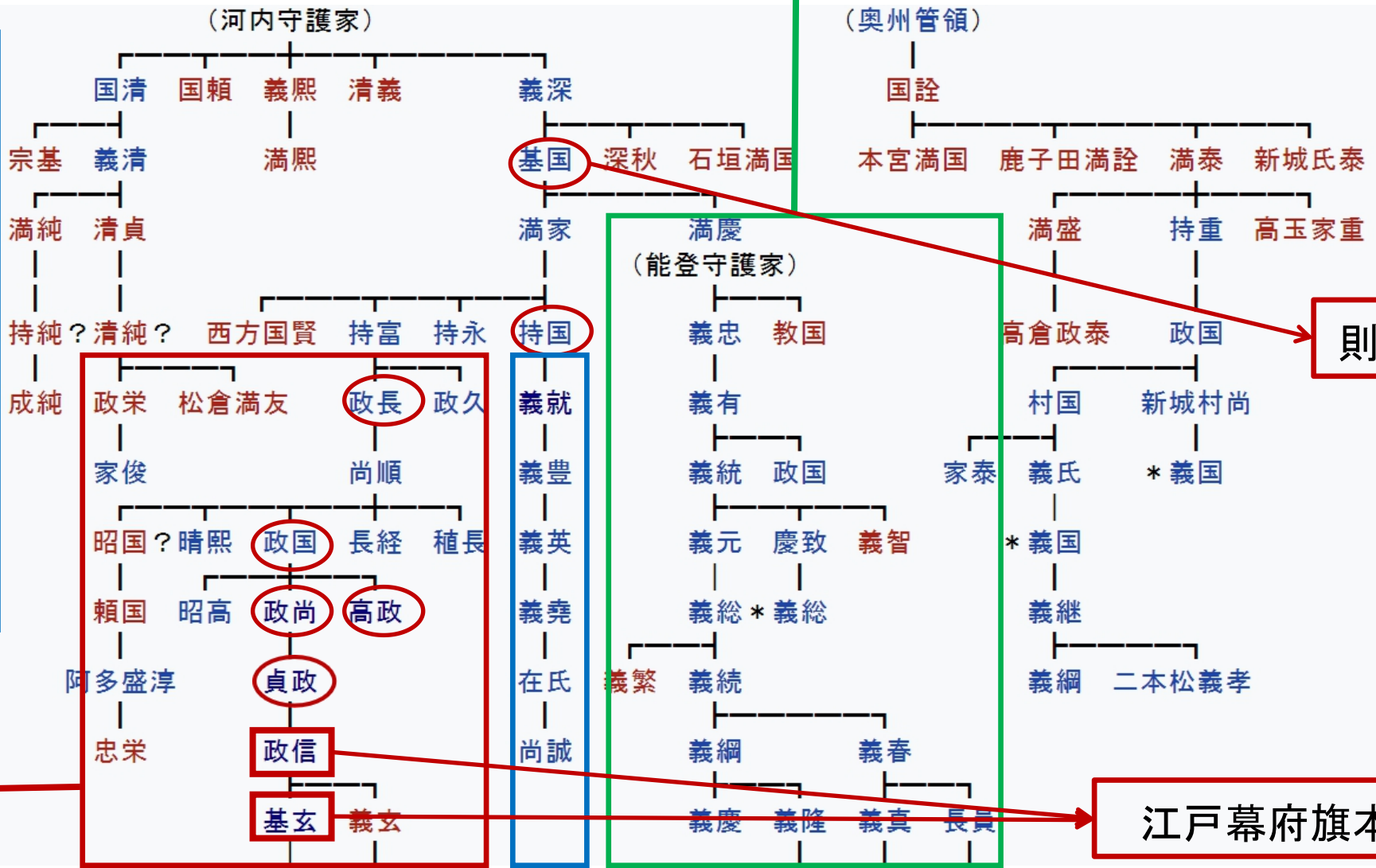
西軍

尾州家 (岩室城主)

総州家

対立

応仁の乱の勃発



能登家

則岡正則を養育

江戸幕府旗本 (高家職) へ

歴代岩室城主(畠山尾州家)

- ① 畠山持国 室町幕府管領、越中・河内・山城・紀伊国守護
- ② 畠山政長 室町幕府管領、越中・河内・山城・紀伊国守護
従兄の義就と家督争いとなり、応仁の乱を引き起こした
- ③ 畠山政国 越中・河内・紀伊国守護、宮原の善国寺を建立した
- ④ 畠山高政 河内・紀伊国守護
- ⑤ 畠山政尚(政能) 兄の高政を補佐し、紀伊国を治めた
- ⑥ 畠山貞政 河内半国・紀伊国守護、天正13年(1585)年豊臣氏に敗れ落城

落城後の畠山氏1/2

畠山政信

岩室城最後の城主貞政の嫡男、妻は豊臣家重臣片桐且元の娘。片桐且元が豊臣家から離脱すると、彼と行動を共にし、大坂の陣では徳川方として戦った。

寛永元年(1624)10月になると、江戸に上って、3代将軍徳川家光に仕え、摂津国八部郡に300石を賜った。

落城後の畠山氏2/2

畠山基玄(もとはる)

300石の旗本政信の嫡男、足利管領家という筋目の良さを認められ、幕府の高家職に列せられた。

更に将軍徳川綱吉の厚い信任を得て、側用人にも就任した。その後も加増を受け、5000石の知行を得た。

以後も同家は幕末まで高家職を勤め、現在に至っている。

祖先からのメッセージ

「則岡系図」1頁より(現代語訳)

天正年中頃(1573～1593)岩室城で起きた戦火により家伝書や他の家宝は破り壊され焼失しことごとく失ってしまった。そのため当家の由緒や家系は今に至るまで不明である。そこで後世へ憂いを残さぬよう、ここに至ってようやく本書を著し、不明となっている事柄を改めて記述することにした。

この文書を著すにあたり、ここに記された内容が子々孫々に至るまで伝わることを願うばかりである。

著者不明(第十二代当主(十左衛門)知貞?)

則岡文書台紙端書(現代語訳)

以下の数々の書類等は、何年か前に畠山殿より頂いた書状です。その時期は畠山殿が豊臣の大坂方でおられた後、徳川家の御代に成り、御知行五千石で高家衆に御取立になられたより前の五年か三年かご浪人であった期間で、まだ南紀岩室城におられた時に頂いたものです。よって先祖より今に至るまで大切に虫干しなどを致しながら代々この書状を受け継いで来たのです。その件について、畠山殿より書状を頂いた頃より当時の則岡家の先祖からの言い伝えでは、万一子孫にいたり一族の家名の存続が困難となった時は、この密書を江戸表の畠山殿へ持参して、故郷紀州の財産等は全て売り払ってしまいましたので、昔の好身で畠山様の御屋敷で、適当なお役目に御登用下さります様、御願する様にと子孫へ申伝えるものです。但し他家からの書面もこの文書の中にあるという事を頭に入れておくように。

第八代目当主**則岡(文大夫)久忠**

出典: 東京大学史料編纂所蔵「則岡文書(影写本)」原蔵者 則岡繁太郎

則岡文書台紙奥書(現代語訳)

承応元年(1653)三月に、江戸の畠山政信公に則岡家のことについて問い合わせたところ、畠山家代々伝来の文書は先年の火事ですべて焼失してしまいました。しかしながら、そなたの曾祖父である(勘解由左衛門)久榮のことは、畠山家中でも人並み外れた比類ない働きぶりで、幾度も忠節を尽くしたとのことを先祖から聞き伝えている、と政信公がお話になりました。

五月九日 則岡(文大夫)久忠

参考資料

1/3

- ①東京大学史料編纂所蔵「則岡系図」謄写本(原題「本国河州橘姓則岡氏系図」)、
原蔵者 則岡文平→(1)、(2)、(3)、(4)、(5)、(7)、(9)、(13)関係
- ②和歌山県立文書館 編『紀州家中系譜並に親類書書上げ下』和歌山県、2012年。
→(4)関係
- ③有田市『戸籍(除籍)謄本』。→(6)関係
- ④和歌山市『戸籍(除籍)謄本』。→(6)関係
- ⑤神社・寺院検索サイト“八百万の神” <https://yaokami.jp/> →(7)関係
- ⑥松帆神社公式HP <http://matsuhojinjya.com/custom.html> →(7)関係
- ⑦生駒佳三「甦る宮崎貞直と有縁の人びと」私家版、2000年。→(7)関係

⑧有田市公式HP <https://www.city.arida.lg.jp/kurashi/sportsbunka/bunka/1000911/1000920.html>

➡(11)関係

⑨宮原地域交流協議会FB https://www.facebook.com/miyaharasanchi/photos/?ref=page_internal

➡(11)関係

⑩和歌山県城郭調査研究会代表 白石博則「城郭史から見た岩室城」(講演会資料、2018年3月11日、有田市文化福祉センター。) ➡(11)関係

⑪Discovery ARIDA Channel #10 天空の城、和歌山の岩室城 4K ➡(11)関係

⑫東京大学史料編纂所 蔵『則岡文書(影写本)』、原蔵者 則岡文平 ➡(13)関係

⑬同上、原蔵者 則岡繁太郎 ➡(13)関係

- ・『紀伊続風土記』卷之五十八(『紀伊続風土記 第2輯』帝国地方行政学会出版部、1911年、349頁)。
- ・太田亮『姓氏家系大辞典 第5巻』国民社、1944年、4640頁。
- ・東京大学史料編纂所 蔵『紀伊続風土記付録 卷之十 古文書之部第十』
- ・同上『則岡文書(謄写本)』、原蔵者 則岡文平
- ・同上『湯川記(謄写本)』、原蔵者 則岡文平
- ・堀内信 編『南紀徳川史 第11冊 卷之106、709頁』、南紀徳川史刊行会、1932年。
- ・高田徹「紀伊・岩室城の虎口・通路再考」(『和歌山城郭研究』17、2018年)。

発表は以上です、ご静聴ありがとうございました。

島崎 康